

Osaka、驚きと喜び

北京科技大学学生代表

見学日時：2018年11月28日（水）14:00-19:15

見学場所：大阪大学

見学概要

大阪大学は今回私たちが訪問した最初の大学である。大阪大学は医学や工学において造詣が深く、日本における「帝国大学」の一つであることから、私は大阪大学についてかねてより耳にしていた。

この日の午後、吹田キャンパスに到着した途端、私は大阪大学の庭園のようなキャンパスに衝撃を受けた。鬱蒼と生い茂った植生に建造物が彩りを添え、その多様な植物と整然としたスタイルの建造物の数々が遠くから相呼応し、人と自然の調和の美を醸し出していた。こうした美しいキャンパスにおいて語り合いそして学ぶことは心地良いものであり、時の流れを忘れさせ、知識の海に完全に没頭することができる。

谷口記念講堂では、歓迎のあいさつの後、私たちは大阪大学の紹介ビデオを鑑賞し、大阪大学についておおよその理解を得たが、私は大阪大学の長い歴史と近代的建築物に感嘆を禁じ得ず、内在的な歴史と新興産業を共に重視する様は歴史と現代の完璧な融合だと思った。また大倉永也博士の学術講演は特に印象深かった。講演は「制御性 T 細胞の発見と免疫システムにおける役割」をテーマに行われた。その中で大倉博士からは T 細胞に関する多くの新たな発見についてのお話があり、T 細胞の免疫システムにおける重要な役割について解説を頂いた。講演を通じて私は、医学の推進における免疫科学の重要な役割について知り、新たな科学的理論や科学的発見は医学ひいては人類の文明を推進する重要な動力源であると感じた。

講演終了後、私たちは相次いで免疫学フロンティア研究センター及び微生物病研究所の「微研ミュージアム」を見学し、研究センターの中国人留学生や日本人学生との交流を通じて実験データや実験結果の誕生のプロセスを直に目の当たりにした。先輩等の丁寧な解説により私は免疫学を真に体験し、その限りない魅力を感じることができた。微研ミュージアムの見学では視野が大きく広がり、回虫、サナダムシ等の標本の陳列では、知ってはいるが馴染みがないこうした生物を初めて目にし、また電子顕微鏡を通じて私たちはミクロの世界独特の神秘を体験することができた。



見学終了後、私たちは大阪大学の学生との討論会に参加した。そこでは各グループが一つのテーマを選び討論を行った。とあるグループは日中の大学生の卒業後の仕事の違いについて討論し、また別のグループは日中の生活における異なる点等について討論をした。これまで私たちの学校の学生は英語での交流については尚更のこと、こうした討論の機会があまりなかったが、多くの日本の学生はこうした討論に慣れていることが分かり、今後私たちもこうした討論の機会を増やすべきだと思った。討論の後は、各グループによる討論結果の発表となった。こうした発表には総括能力、論理的思考能力や表現能力が求められる。各グループの成果はそれぞれ異なっていたが、皆各グループの発表から日中の文化や生活面に関する知識を得ることができた。

討論会終了後、一行は懇親会に参加した。懇親会では中国と日本の学生が共に食事をしながら語り、友情を深

めた。私たちは大阪大学の余菁華さんと友達になった他、かつて北京科技大学の同じ学部で学んだ経験のある先輩とも知り合った。懇親会はとても楽しかった。



感想

いずれにしても、大阪大学では珍しい体験をすることができた。初めて日本の同年代の若者と交流し、日本の大学キャンパスに足を踏み入れ、日本のキャンパス文化を体験し、日本の大学の研究の方向性について知るなど、こうしたたくさんの初体験は、初めて日本を訪れた私たちにとっては新たな課題となった。私たちは中国で学ぶ知識によって日本の研究プロジェクトを理解し、英語や日本語を使い日本の大学生と意思疎通を図り、彼らと協力し様々な課題を解決し、これらをきっかけとして多くのテーマについて探求していく必要がある。どこで買い物をするか、どのような美味しいものがあるかといった話題から、日中の大学生の就職状況の比較そして日中の社会や文化の違いの分析、さらにはマクロ的で大きな話題まで、どのように日中の友好を促進していくのか、こうした討論の背後には若者世代の矛盾が存在する。

そしてこうした話題の背後には、私たちの目新しい物事への憧れや探求心があり、またより豊かな生活への追求がある。もちろん、不確定な未来への不安や今後訪れる未知なるものへの恐怖もある。だが最も重要なのは、若者世代の中国人が日本人々とどのように付き合いそして発展していくかということをしかりと展望することである。